

鴨河倭歌考

伊 東 勉

石川克の編纂した『新編覆醬集』巻之四の末尾には倭歌一首と題して次の和歌が載せてある。この和歌について石川克は凡例で、「鴨河倭歌一首採録之以世人之所誦故也」とことわっている。これによって見るに、この和歌は寛文、延宝の頃にすでに人口に膾炙していたようである。

鴨河をかきり都のかたへ
いつましきとてよみ侍りける
わたらしな瀬見の小河の浅くとも
老の波そふ影もはつかし

まことに清雅な和歌である。ところで、この和歌の上の三句は鴨長明が一光行賀茂社歌合において詠じた「石川やせみののがはの清ければ月も流を尋ねてぞすむ」という歌によるものである。この和歌は『新古今集』に載っているし、鴨長明自身が『無名抄』において、この歌について説明をあたえているから、石川丈山は当然これを知っていたであろう。「石川や」というのは、「せみののがは」の枕詞であろう。鴨長明の和歌では「せみののがはの清ければ」となっている。そのために丈山の歌についても、時々「清ければ」とあやまり伝えられた。たとえば松崎堯臣の『窓のすさみ』第三では、「渡らじなせみの小川の清ければ老の浪そふかげもはづかし」としてある。『翁草』巻百十八の雑話、津村涼庵の『譚海』巻之十、『本朝語園』などでも「清ければ」としてある。

また最後の二句については、茅原定が『茅窓漫録』上巻において、『後拾遺集』旅部にある前大僧正隆辨の和歌、「七十の年ふるまゝに鈴鹿川 老の浪よる影ぞかなしき」^{ナナツジ}によったものとしている。「是をふみてよみ、七十才によくかなへり」つまり石川丈山も隆辨とおなじ七十才になって、隆辨のこの和歌を本歌として詠じたというのである。

閑田子伴蒿蹊は『続近世崎人伝』において、石川丈山はこの和歌を、後水尾上皇から召された時に作ったとして、はじめは「渡らじな世見の小川の浅くとも老の波たつ影もはつかし」となっていたのであるが、後水尾上皇が「雌黄を下し給ふて」、この歌の「波たつ」を「波そふ」と訂正してくださったとのべている。しかしながら、この和歌は丈山が後水尾上皇にさしあげたものではない。とにかく、「千古の絶唱」と呼ばれているこの和歌は、石川丈山が七十才のときに、ある動機によって、鴨長明と前大僧隆辨との和歌をよりどころとして、創造したものである。

石川丈山自身がこの鴨河倭歌について、「武杏仙摘予倭歌之末字和韻又次其韻」と題して、次の二個の詩を創造した。この二個の詩も『新編覆醬集』巻之四の末尾に載せてある。ひとつは次のとおりである。

蓬門蒿室遠城市 曾慣伯陽了足止
榘枿若流洛川來 被梅柳知也可恥

榘枿とは「斜に切った枝に生える芽」。伯陽は老子^{フザナ}の字である。丈山自身はせっかく老子に慣れているのである。ごつごつした切枝が鴨川を流れていったならば、梅や柳に笑われるだろうというのである。丈山には、ほかにも「由来慚愧遊城市 柳眼窺人花笑人」という詩句がある。他のひとつは次のとおりである。

一臥東山耽山水 紙被葛衫老行履
猿鶴從來雖愛吾 声聞過情君子恥

丈山はここで、京都でこれまでに交際していた人々を愛して猿鶴と呼んでいる。あまりに情に溺れて深い仲になるのは、君子の恥とするところだという。この二個の詩から推察すれば、七十才に達した石川丈山が、京都へ出かけることはきっぱりとやめて、枯淡な隠栖をきわめて洛北の自然に没入しようという決意を表明したのが、鴨河倭歌である。けれども、かれにこのような決意をさせた事情はもっと複雑且つ深刻であった。『新編覆醬集』第一巻の東溪石先生年譜すなわち石川丈山年譜のなかの承応元年壬辰の項を見よう。

公七十歳。有還郷之意。請京尹板倉重宗曰余一乘寺居世人熟識之來問者難拒之三州泉郷者余故園而備前守松平隆綱之采邑也隆綱與余爲親余欲歸故園而靜退如何。重宗不許。故不能還泉郷。於是使官医武田道安言重宗曰我既老矣欲歸三州公不許之曾絶世事厭與人交。自今而後不可出京師然則不詣公所公勿訝焉。重宗報曰卿隱士也宜任其意。公作鴨川之倭歌遂不出京師。先是官議按檢天下之流客。其議及公。時重宗在江府。告請幕下曰丈山隱於比叡山之下彼乃幕下世臣子也非如他流客不可疑之。故重宗不許公之還郷。

この東溪石先生年譜は竹洞金節すなわち人見竹洞が石川克から「事実一卷」の資料を提供され、また石川丈山の親戚である天野長重からも促されて書いたものであって、その内容は信憑すべきである。ここで上記の承応元年壬辰の記事を検討しよう。

第一。石川丈山はこの年に七十才の高齡に達して、故郷の三河国泉村へ帰りたく願った。

『参河志』第十二卷碧海郡（下）の泉村の項には「松平右衛門大夫領」，「石川丈山今に屋舗跡あり」と記してある。泉村の石川丈山の領地は，かれが元和元年大坂夏の陣に際して徳川家康の軍令を破って抜駆けの功名を立てたのを咎められて改易没収された。けれども，丈山の邸は元のまま残っていた。この屋敷については菅茶山が「寄題丈山先生故宅」という詩のなかで「矢矧川頭讀書窟 東行恨指遠林過」と詠じている。石川丈山は寛永十八年から一乗寺詩仙堂で生活するようになってからも「詠懐」という詩で「故国三川遠 新居五岳鄰」と三河の故郷をなつかしがっていた。今や七十才に達して，かれは京洛を去って，泉村の領主松平隆綱を頼って三河の旧居へ移ろうとしたが，京都所司代の板倉重宗がこれを許さなかったのである。

第二。板倉重宗が許可しなかった理由をあきらかにするまえに，板倉と丈山との従来関係を考察しなければならぬ。京都所司代の重責を世襲していた板倉氏，京都に在住して徳川家のために西国の情報を集めていた茶屋家の一族，それに石川丈山などはいずれも三河出身の徳川譜代の武士であって，京都においても親交をつづけた。板倉重宗と石川丈山との交友について述べるべきことは多々あるけれども，ここではこの小論にふさわしい事例をあげよう。

(1) 『新編覆醬集』巻之三に「赴板京尹都廳謝茗飲」と題して次の詩がある。

懶性從來逕路通 年年茗飲被招公
不愁杖履家山遠 帟袂飄然兩腋風

この詩によって，石川丈山が毎年，京都所司代の役所で催される茶会に招待されていたことは明らかである。

(2) 広島から『尚古』という雑誌が出ていた。大正十年発行の『尚古 石川丈山先生記念号』には板倉周防守重宗が慶安元年子五月十日に石川丈山に出した手紙がのせてある。この手紙は当時，岡山県高梁町に住んでいた丈山の子孫である石川充夫という人が所蔵していた。興味ある手紙であるから，ここに全文をしめす。

一筆申入候 一乗寺山中故 鹿切々出候由承候 不寄何時 鉄砲にて可有
御打候 定而小鳥も出可申候間 可有御打候 山城我等折紙無之所にては
私に打不申候間如此に御座候 恐々謹言

慶安元年に石川丈山は六十六才であった。親愛の情のあふれる手紙である。一乗寺の詩仙堂のあたりで，鹿でも小鳥でも鉄砲で打って楽しんでください。けれども，この山城の国では京都所司代の私が折紙（保証）をあたえないところでは打ってはいけませんよというのである。「丈山の口のすぎたる夕涼」という与謝蕪村の俳句がある。この頃の石川丈山は随分，勝手気儘な言動をしていたが，板倉重宗はそれをやさしくいたわって，大目に見ていた。

(3) 石川丈山は寛永十三年に広島の浅野氏に仕えるのをやめて京都へ来た。時に五十四才である。彼はまず相国寺の近くに住居を定めた。板倉重宗から幕府に仕えるようにすすめられたが、退隱の志をのべて拒絶した。「松菊吾当作主人 朱門雖富不如貧 平生性癖耽閑淡 何用浮名絆此身」という詩は、この時の作であるといわれている。ところで石川丈山は、寛永十四年から十五年にかけて天下を聳動した天草の乱にふかい関心を抱いた。この叛乱について述べている丈山の二通の手紙があるので、その個所をここに引用しよう。ひとつは野間静軒にあたえた手紙の一節である。

板倉尚食監前月晦日至於肥州云云ム聞廿六日到豊之小倉也頃聆彼蛮賊之徒
凡近敗亡戸左門氏松豆州牧后月旬餘可臻伏見是又足下熟所知也

板倉尚食監とは板倉重昌のこと、松豆州牧とは老中松平信綱のことである。この文章は天草の乱に際しての幕府の要人の動静をのべている。もう一通は名古屋にいた堀正意の手紙にたいする返書である。当該の個所を引用しよう。

如教諭西州蛮賊之私党可憎之甚也彼雖有数百万口氓 隸之人木兵竿旗何驚
怖之有網裏之跳魚樊中之飛禽一朝可亡到興亡治乱有識者識之只東照大君之先
知可感可仰

東照大君之先知というのは、徳川幕府を打倒しようとする運動はかならず西国の大名から起るだろうという徳川家康の予言のことである。石川丈山は家康のこの遺訓に感嘆している。丈山は隱遁を表明していながら、当時の日本の社会的政治的動向に常に重大な関心を寄せている。

(4) 丈山には「題大樹朝貢鶴 爲板京尹所句」という題の次の詩がある。

咬獵有時初獻獲 昇平政事贈朝廷
東天玄鶴入仙輿 便作堯羹延聖齡

徳川幕府の将軍が朝廷に鶴を献上した。その鶴は天皇の食膳に上って栄養となるのであろうという詩である。ここでは石川丈山はまったくの御用詩人である。『覆醬集』を見ると丈山はこの詩のほかにも、板京尹すなわち京都所司代板倉重宗の依頼をうけて、かなりの数の詩を作っている。『故老伝説』という随筆集によれば、石川丈山は「北山鴨川の水源に遊歴して水脈分疏の方法を案検し」板倉重宗、角倉了意と謀議して鴨川の治水を行わせたということである。板倉重宗は石川丈山を詩人として敬愛していただけではなくて、徳川幕府に忠誠な有能な武士として頼りに

していた。そこで石川丈山は徳川幕府のスパイであるという説が生じた。佐藤一斉の『愛日楼集』のなかの「夢丈山詩竝叙」という詩文こそ、この丈山スパイ説のもっとも有力な典拠となっている。一斉のこの詩のなかには次のような詩句がある。「犯律猷讖負微罪 欲爲国家作遊偵 真忠自甘人不諒 無心利達与声名 一朝有変吾先識 無則清高終此身」 宮武外骨は富岡鉄斎に教えられたとあって、その著書『明治密偵史』のなかで、丈山スパイ説を強調している。石川丈山は徳川幕府から公式の密命をうけた隠密ではないだろう。けれども、かれと京都所司代板倉重宗とは同郷の三河武士というだけではなくて、ここで示したように親交があった。また丈山は野にいても、社会的政治的情勢につねに深い関心を抱いていた。それゆえに、石川丈山が知らず知らずのうちに京都所司代の手先となっていたことはたしかである。そのうえ慶長十六年から寛永六年まで天皇の位にあり、その後は院政をおこなわれた英明な後水尾天皇は幕藩体制確立期の徳川幕府にとっては、かなりうるさい存在であった。詩文風雅によって公卿たちにも尊敬されていた石川丈山は、この方面でも板倉重宗に利用されていたようである。

第三。板倉重宗が石川丈山の三河への転居を許さなかった理由は、当時の徳川幕府の流客（浪人）にたいする取締りであった。幕藩体制は士農工商の身分を確立することを必要とした。この場合に、幕府にも藩にも仕えていない武士、つまり流客はこの封建社会のあぶれ者であった。寛永十四～十五年の天草の乱も、慶安四年の由井正雪の陰謀も、これらの流客が指導者となってくわだてられた。明和事件の山県大弐や、幕藩体制へのもっともきびしい批判者であった安藤昌益も流客として活動した。さきに引用した『東溪石先生年譜』のなかの承応元年壬辰の項に記してあるように、徳川幕府の上層部において「天下之流客」について「按検」すなわち調査検討がおこなわれて、石川丈山も流客の一人として議題となった。たまたま江戸へ来ていた板倉重宗が、丈山は徳川氏の譜代の武士の子孫であって、他の流客とはちがって徳川将軍にたいして忠誠心を抱いていると告請した。これはおそらく慶安四年の由井正雪の陰謀事件の後におこったことだろう。板倉重宗は、我儘者の丈山を三河へ転居させたならば、かならず面倒な事件をひき起して幕府権力から危害を受けるだろうと思ったので、丈山を洛北の詩仙堂にとどめおくことにしたのである。

第四。三河への転居を禁止された石川丈山は官医の武田道安を通じて、今後は京都へは出かけない、したがって板倉重宗を訪問することはないと、板倉に告げた。板倉はこれを承認した。丈山は鴨河倭歌を詠じて、その後ふたたび京都へ出かけることはなかった。それゆえに、鴨河倭歌は、まったくの隠遁生活にはいって、正常な社会生活、いわんや政治活動などはきっぱりやめてしまうという宣言である。

慶安四年に徳川家光が死去した。家康、秀忠、家光の三代の治世のあいだに徳川幕藩体制は確立した。四代将軍家綱から徳川時代は安定期にはいった。石川丈山は芸州広島で浅野氏に仕えていた元和九年から寛永十三年までの十四年間には西国の政治的社会的情勢に注意を払っていたし、寛永十三年に京都へ戻ってからは、京都所司代板倉重宗に協力して徳川幕府政権の安泰のために

いろいろと画策した。ところが、徳川政権が定安期にはいると、流客である丈山は危険人物と見なされて、幕閣で詮議されるということになった。徳川家の正史である『台徳院殿御実記』巻三十七（『徳川実紀』第二編）に石川丈山について次の記録がある。「石川嘉右衛門重之は。大御所旗本より抜掛して首二級をとる。重之軍令違反の罪によりて御勘気蒙り。隠居して丈山と号す。」丈山についての記事はこれだけである。自分が軽視され、あまつさえ危険人物と見られていることを知った、あるいは感づいた丈山は、ばからしくなったであろう。そしてまた危険人物である自分と交際すると、板倉重宗は迷惑するかも知れない。そこで石川丈山は鴨河倭歌によって完全な隠遁を世間にたいして宣言した。この推測の正しさを示す丈山の詩を引用しよう。『新編覆醬続集』巻之二に「嘆老」と題する次の詩がある。

生涯似老馬爲駒　　體魄雖全非故吾
四十三年如電抹　　昵友密友一人無

これは丈山が自分の心境を率直にのべた珍らしい詩である。詩のなかの「四十三年」には石川克が、「曰大坂乱後」と割註をつけている。それゆえに、この詩は大坂夏の陣の後、四十三年を経た万治元年、すなわち石川丈山が七十六才の時の作である。「老馬ノ駒ト爲ルニ似タリ」とは丈山の生涯は、老衰した馬が乗馬になったようなものだという意味である。石川丈山という老馬を馳駆させたものは、主観的には丈山自身の欲望であった。けれども、それは客観的に見れば幕藩体制の確立に向って進む時代の動向である。改易されたとはいえ、石川丈山は徳川氏発祥の地である三河の譜代の武士の子孫として、幕藩体制確立のために協力した。「枕頭三尺剣」を徳川幕府のために揮う覚悟は常にあったのだ。「體魄全タシト雖モ故ノ吾ニ非ズ」というのは、流客として幕閣からは危険人物と見なされて、鴨河倭歌によって完全な隠遁を宣言した自分は、むかしの自分ではないという意味である。板倉重宗は明暦二年に、林羅山は明暦三年に死去し、「難波元献馘　鏡鼓耳如聞」と丈山がなつかしがった大坂夏の陣の戦友もほとんど故人となってしまった。丈山が老衰した乗馬となって無理な努力をつづけてきた自分の過去を反省して、現在の孤独な境涯を嘆じた詩である。

もうひとつ『新編覆醬続集』巻之七にある「記老懐」という題の詩をしめそう。

椿寿八旬過　　棲遲凹凸窠　　謀生嘗藜少
至老覽書多　　永樂啓期樂　　未歌林類歌
道心忘世故　　幸得免風波

この詩は八十才を過ぎてからの作である。凹凸窠とは詩仙堂の別名。「至老覽書多」とのべているように、丈山は高齢になっても、随分たくさん本を読んだ。最後の二句がもっとも重要である。道をもとめて世情を忘れるようにしたから、幸運にも風波を免れることができたという

意味である。幕藩体制からはみだしてしまっただの流客の石川丈山は、世を避けて読書に耽り、自然に没入することによって、幕府権力からの危害をようやく避けることができた。徳川幕藩体制は、世界史においてももっとも完備した監視組織をそなえていた。この監視網は鎖国政策と将軍と大名による二重の統治によって成立したのである。

さて承応元年に政治や社会生活から完全に引退した石川丈山は、一乗寺詩仙堂でまったく孤独で暮っていたのではない。かれの養子となった石川克が側近にいた。白隠の『夜船閑話』には、かつては石川丈山の師範であって、靈寿三百才に近い白幽子という仙人のことが述べてある。この白幽子は石川丈山の甥であり、同時に弟子であって、詩仙堂の近くの瓜生山にながらく隠棲していた石川慈俊という人物であることが、伊藤和男氏の研究で明らかになった（『歴史読本』二百二十七号、昭和四十九年九月号）。この白幽子も丈山の身の世話をしたであろう。瀧沢馬琴は『玄同放言』において、随筆『雪斎紀事』をよりどころとして白幽子を丈山の下僕であるとしている。また丈山に心服していて、丈山の死後に詩仙堂の経営にあたった平岩仙桂も、この孤独の詩人を慰めたであろう。平岩仙桂は忘筌と号して、すぐれた詩人であり丈山の高弟である。これらの弟子に守られて、石川丈山は詩業にはげんだ。さきに引用した東溪石先生年譜の寛文十二年壬子の項には次の記事がある。「公九十才。春正月諸門生賀九十算。友人多寄雅詞祝之」

石川丈山が偉大であるのは、七十才のときに社会生活からほとんど完全に引退してしまっただの後に非常な努力をはらって、立派な漢詩を創造した点にある。丈山はすでに広島で浅野氏に仕えていた頃にも詩作をつづけていた。寛永十八年以後、詩仙堂に住むようになってからは、いよいよ詩作にはげんだ。けれども七十才以前、すなわち鴨河倭歌より前のかれの漢詩は、一般的に俗っぽくて、読者にあたえる感銘を狙った技巧的な作品が多い。冷酷な徳川幕府権力と完全に絶縁した七十才以後に、石川丈山は何物にも拘束されない自由な境地を得て、真に詩人としての本領を発揮することになり、七十代、八十代に老来ますます努めて、すぐれた漢詩を創造した。江村北海が『日本詩史』巻之三において、丈山の詩に関して、「余其ノ集ヲ覽ルニ、句拙累多ク、往往俗習ヲ免レズ」と評しているのは、鴨河倭歌より前の作品についての評言である。江村北海がこれに続けて「當時諸儒ノ詠言、率ネ性理ノ緒余ニ出デ、溫柔ノ旨ニ乏シ、而シテ丈山独リ山林ニ夢寐シ、襟懷瀟灑タリ」と述べているのは七十才以後の丈山詩を賛美したのである。丈山はことに花を愛して、花をたたえた詩が多い。ここでは丈山の晩年のすぐれた詩を二個あげよう。『新編覆醬統集』巻之二の「咏花二首」のひとつは、次のようである。

花花無数花　　花落又開花　　花似争花色　　紅花映白花

「倚節吟」という次の詩は『新編覆醬統集』巻之七の末尾にあって、九十才に達した丈山の最

後の作品だろう。

倚筇藪里辺 社樹聳森然 犬吠乞兒後 牛耕農父前
生涯寒澗水 老病夕陽天 偏極煙霞染 百齡少十年

頼山陽が「論詩絶句」のなかで石川丈山を評して次のように詠じた。

抛劍援毫豈等閑 現身欲列古仙班
領他三十六峰碧 却乞殘煙向五山

丈山は詩仙の列に入ろうとねがい、洛東三十六峰の碧を領有して詩作に努めたが、結局は五山文学の詩風に追随したというのである。たしかに、丈山の詩は、詠史、諷刺、慷慨、警世というようなものではなくて、禅林で発達した幽寂な自然詩に属している。自然に没入することによって、自由な境地を得ようとする非凡な努力の表現である。これは当然のことである。石川丈山は七十才のときに、政治や通常の社会生活から絶縁してしまったのだから。藤原惺窩が元和四年にすでに丈山の詩「漁村夕照」を見て、「この人後必ず詩家とならん」と予言した。丈山は天性の詩人であって、詩人としての天才を、鴨河倭歌以後の二十年間に、すなわち七十代、八十代に、あますところなく発揮した。しかしながら、その詩はほとんどすべて自然詩にかぎられていた。

石川丈山以前には、漢詩は公卿、武士、僧侶、学者などの余技であった。漢詩漢学に造詣のふかい人たちが、折にふれて漢詩によって詩情をのべたにすぎなかった。漢詩の創造を生涯の事業とする専門の詩人が出現したのは江戸初期であって、石川丈山、釈元政などがその先駆者である。それゆえに、石川丈山は日本近世文学の、すくなくとも日本近世文学のうちの漢詩というジャンルの発達のための基礎をかためた人といえることができる。丈山は松永貞徳、木下長嘯子などと交際していた。ことに木下長嘯子と石川丈山とは日本近世文学の高踏派的傾向を確立したといえるだろう。二人とも社会生活から絶縁して、詩文のうちに自由な世界を獲得しようと努めたのであるから。この高踏派は、監視がきわめてきびしい徳川幕藩体制下で、教養のたかい文人のあいだに自然に生じた。

追記 (1) 石川丈山の年齢は「東溪石先生年譜」による。天正十一年の生年がすでに一才となっている。いわゆる「呼び年」による年齢である。

(2) 元禄十七年すなわち宝永元年に刊行された『覆醬集』巻下においては、鴨河倭歌は万葉假名で次のようにかいてある。和多良志那蟬乃小川乃浅久登母老乃浪曾不影毛波津加之

(3) 『覆醬集』『新編覆醬集』『新編覆醬統集』『新編覆醬統集附録』はすべて刈谷市立刈谷図書館所蔵の村上文庫によった。この貴重な文献の利用に、きわめて親切な助力をしてくださった刈谷図書館にたいして心から御礼を申しあげる。